

待降節を迎えて

クリスマス、それは神の独り子であるイエス様が人となられてこの世に誕生されたことを心にとめる日です。目で見ることができなかった、直接声を聴くことができなかった天の父である神が、その独り子をこの世に誕生させることでご自分の思いを目で見、耳で聞くことができるようにしてくださったということです。そしてその表し方は、貧しく、小さく、静かに、しかし深い闇の中で一段と輝く光のかたちをとられたということです。そのクリスマスを迎えるために、私たちに必要なことは、私たち一人ひとりが自分の中にある闇、そしてこの社会の中にある闇を見つめることだと思います。闇を素直に見つめることができる人こそクリスマスの本当のあたたかさがわかります。

聖書の中のヨハネ福音書の初めには「その光はまことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。」と書かれています。私たちの中にある闇をその光で照らすために神の独り子は人となって私たちのもとを訪れてくださった、それがクリスマスの意味です。私たちにとってこれは信じられない出来事かもしれませんが、しかしこれは私たちの歴史の中で実際に起きた出来事なのです。神様はご自分を表される時、私たちと同じ小さき者として、そして貧しさを背負う者として表されました。そのことを一番身をもって感じたのは最初にその誕生の場所を訪れた羊飼いたちだったと思います。貧しく蔑まれながらも寄り添いあいながら生活していた羊飼いたちは、馬小屋の飼葉桶に寝かされた幼子を訪ね、「神をあがめ、賛美しながら帰って」いきました。この羊飼いたちの喜びはどういう喜びだったのでしょうか。それは救い主がこんなに近くに自分たちと同じように貧しく無力な姿で来てくださったという喜びです。自分たちは神様から見放されているのではない。神様はこんなに小さく貧しいかたちでこんなに近くに来てくださった。これが本当のクリスマスの喜びです。貧しくても素朴に神様からの救い、神様からの力を呼び求めている人たち。人間に向かってではなく、神様に心の叫びをあげていた人たち。自分の無力さ、弱さをよく見つめていた人たち。心から神様を待ち望んでいた人たち。そのような人々の側に神の独り子は誕生されました。

クリスマスを迎える準備をする私たちに大切なことは、自分の中の「貧しい部分」「飢え渴いている部分」は何かをよく見つめることです。また私たちの周りの家庭や社会、そしてこの世界の中で「貧しい部分」「飢え渴いている部分」は何かを意識していくことです。私たちが住むこの日本の社会は経済的に豊かになり、物に囲まれ、快適で便利な生活を送ることができるようになりました。しかしその分、人と人との交わりや互いを思いやるあたたかい心は弱くなってしまったかもしれません。

問題にぶつかってもそれを話せる人がいない、1日、仕事や学校に追われ、息つく暇もない。病気や体の不具合からくる痛みもある。そして何よりも人との関わり、交わりがだんだんうすくなっている。そのような中で多くの人が孤独を感じています。闇の中で叫びをあげている人々がいます。

私たちは少し静かな時間を取って、私たちの貧しさ、そして闇を見つめる時間を取ることが大事です。一人ひとり静かに立ち止まって、自分の貧しさ、闇の部分を見つめましょう。そしてそのような私たちのために、神の独り子が光として誕生してくださったことを思い起こしましょう。素直に心を光に向けていくとき、私たちは真のクリスマスのありがたさがわかるでしょう。

私たちは皆、足りなさを抱えています。なかなか他者のための場所を自分の心の中に持つことができないでいます。でもそのような私たちだからこそ神の独り子であるイエス様はこの世に来てくださったのではないのでしょうか。うまくいっていない、どうしようもない私を愛し、そのあたたかさで包み、支え、励ますために、そして私たちが歩むべき大切な道を教えてください。イエス様は神の子でありながら私たちと同じになってくださいました。そしてただ同じではなく貧しく小さな姿になってくださいました。立派な宿屋の部屋ではなく、貧しい馬小屋で誕生してくださいました。そのことを通して神様の心と私たちを大切にしてくださいる愛を示そうとしてくださいました。

クリスマスの晩、私たちに大切なことは、静かに見つめることだと思います。自分の弱さも足りなさもそして自分が抱えている闇も。同時にイエス様がそんな私たちだからこそ、もたらそうとしてくださるあたたかな光を。クリスマスの晩は大騒ぎはいらぬ気がします。少し明かりを落として、静かに、神様が行われた出来事を見つめる。そしてクリスマスの出来事は2千年前だけではなく、今も私たちの心の中に起こっている出来事であることを思いたいです。クリスマスの日、本当に人間に大切なもの、それを思い出し、それを大切にする日にしたいです。クリスマスの晩、病院で過ごす人もいるでしょう。仕事の中で迎える人もいるでしょう。でもどんな場であっても、皆が人として一番大切なこと、それを思い出し、大切にしようと思いたいです。そのような心を持つことが一番のクリスマス、主の御降誕の祝いになるのだと思います。

